

# なごや 文化 情報

2022

Autumn

No.403

NAGOYA  
Cultural  
Information

Pick Up Gallery / YEBISU ART LABO

随想 / 舞台照明家 花植厚美さん

この人と... / メルヘンハウス初代代表 三輪 哲さん

視点 / 第18回ショパン国際ピアノコンクールを中心とした若手音楽家の躍進

#zoom up / 画家 水上卓哉さん



2022

Autumn

表紙

かき ぷ きん  
柿付近

(2019年/H119cm×W150cm/C-print)

2005年に開催された愛知万博の看板が、産廃業者の外壁として転用され、前景には実る柿が踊っている。美と醜が混在し、意味や名前から解放された風景に、眩し過ぎる太陽が今日も降り注ぐ。



Contents

- Pick Up Gallery YEBISU ART LABO..... 2
- 随想 舞台照明家 花植厚美さん ..... 3
- この人と… メルヘンハウス初代代表 三輪 哲さん..... 4
- 視点 第18回ショパン国際ピアノコンクールを  
中心とした若手音楽家の躍進..... 8
- #zoom up 画家 水上卓哉さん.....10

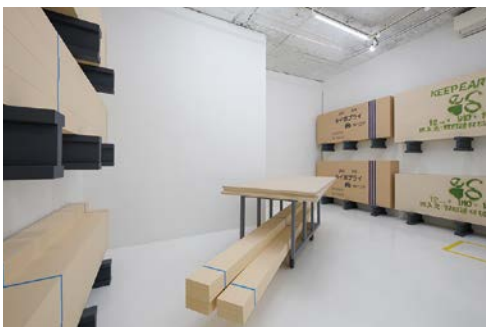
「なごや文化情報」編集委員

- 上野 茂 (ナゴヤ劇場ジャーナル編集長)
- 杵屋六春 (長唄・唄方 名古屋音楽大学講師)
- 黒田杏子 (ON READING)
- 鈴木敏春 (美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)
- 瀧津清仁 (指揮者)
- 吉田明子 (人形劇団むすび座 制作部長)

き ど たもつ  
城戸 保

- 1999年 愛知県立芸術大学美術学部油画専攻卒業
- 2002年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了
- 2020年 「光一呼吸 時をすくう5人」原美術館(東京)
- 2021年 「駐車空間 / 絵画建築 / 案山子」HAGIWARA PROJECTS(東京)
- 2022年 「瀬戸現代美術展2022」(愛知)

Pick Up Gallery



資材館 丸山のどか個展 2022年3月11日~5月1日

YEBISU ART LABO エビスアートラボ

80年代、名古屋は現代美術が盛んな都市として全国に美術を発信していました。当時、学生だった私は、匂いで何処のギャラリーか判るぐらいに美術を感じることができました。その時代の息吹を取り戻したく、新しい形の情報交換の場、お客様にとって新しい作品の鑑賞の場、単なる作品販売の場だけでなく美術の実験場、すなわちYEBISU ART LABOをオープンしました。美術作品を物質(物)として捉える考え方もあるのですが、物としてだけではなく精神(心)を含んだ作品が美術の理想だと考えています。これからも、単なるプライマリー・ギャラリーではなく、長い時間をかけて、取り扱うアーティストの環境をつかっていきたいと思っています。

設立 2002年 代表 原 充諭  
住所 〒460-0003 名古屋市中区錦2-5-29  
エビスビルパート1 4F  
電話 052-203-8024

取り扱い作家 今村 文、小栗沙弥子、迫 鉄平、鈴木優作、上田 良  
山下拓也、弓指寛治、久留島 咲、丸山のどか ほか  
ウェブサイト <https://yebisu-art-labo.jimdofree.com>

# 随想

## 【色彩】感覚



舞台照明家

はなうえ あつみ

花植厚美

愛知県の知多半島、海辺で生まれ育ち、高校はデザイン科のある常滑高校へ進み、演劇部に所属。3年間、モノづくりに従事。平成元年、若尾総合舞台研究所入社。平成9年、退社。その後、フリーの舞台照明を主な仕事として現在に至る。

名古屋市文化振興事業団第2回名古屋女性演劇賞受賞。公益社団法人日本照明家協会会員。

【色彩】しきさい。辞書を開くといろどりや色合い、色調、とあります。

好きな色って、ありますか？ 私は、グレーやシルバーが好きです。部屋の中、身につける物、知らず知らずに選んでしまいます。洗礼された黒や潔い白も素敵ですが、なぜか、自分がニュートラルでいられる色なんです。

色って不思議です。暖色系に囲まれると体感温度が上がったり、鼓動も速くなったり、元気になったり、食欲が増したり。寒色系だと、涼しく感じたり、集中できたり、心が落ち着いたり。

以前に何度か、お芝居の客電（客席の照明）に色温度の下がるブルーのフィルターを入れたことがあります。“夏の公演だから”、“脚本がミステリーだから”、“セットがコンクリートのイメージだから”、“冷たさを感じてほしいから”、と理由は様々です。

日本という国には四季があり、色とりどりに一年を通じて景色が変化していきます。親切な自然が、色彩というものをとても分かり易く、無償で教えてくれる。いつも色が放つ沢山のエネルギーを受けとってばかりな気がします。

幼い頃、視力検査は2.0、目は凄く良いと思っていました。空を飛ぶ蝶の羽の模様や、虫の羽ばたきがスローに感じたり、よく見えていました。一方、教室の黒板から手元の教科書に視線を移すと、いつも3秒近くピントフリーズ、辛くて長い3秒。さらに、雨の日は蛍光灯がまたたき、これが辛い。ずっとフリッカー状態なのです。しまいには吐き気でトイレや保健室に駆け込みます。

大人になり検査をして判明しました。中度の遠視と視覚過敏です。今でもTVやPCの画面は、少し疲れてしまい苦手です。感受性が強過ぎて困ることは多々あります。たまに、「ん？ 自分以外の人にも、はたして同じ画像が見えているのだろうか？」と、少し心配になること

もあります。

瞳を通して、見えている被写体や背景は、一人一人異なる色合いや風合いなのでしょう。ブラウン・ヘーゼル・グリーン・ブルー・グレー、大きく5種に分かれるヒトの虹彩の色。世界中の人によって、見える世界は、どれくらい違うのでしょうか。

【自然光の中で】

- 赤い林檎+太陽の光→赤色=甘くて美味しそう。
- 赤い林檎+月の光→?=?

もしかしたら、茶褐色に見え、同じ林檎なのに腐りかけて...などと、匂いまで感じとれるかもしれません。

【舞台上で】

- 夏の昼の景=真上からの強い光源の白い光に陰影が暗く強く浮き出ます。肌に当たる光、皮膚は真夏の温度を受け止めているか否か。
- 冬の夜の景=バックからのフラットな銀灰色の光に照らされる体の輪郭。照らす宵闇は黒なのか？ 舞う雪は白なのか？ はたして、一瞬でも刺すような冷気で劇場を満たせたか否か。

感じ取る力、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚。自分がこれまで生きてきて、体験を重ねてきたもの、本やメディアから受け取った数々の歴史や情報が、発信する創り手にも、受け取り手にも、それぞれの経験値に応じて多種多様に伝播してゆきます。

“嘘に嘘をぶつけて本物にする。”

そんな仕事をしています。その為に必要な物を自然からも沢山貰っています。体感していないと、嘘は簡単にバレるから。自分に。

日々の、何気ない生活やそこから湧き出る、インスピレーションを大切にしようと考えます。世界は、なんて極彩色なんだろう。

# この人と...



## メルヘンハウス初代代表

み わ てつ  
**三輪 哲**さん

### 子どもと、子どもの本を見つめた50年

1973年、名古屋市千種区四谷通に日本で最初の「子どもの本専門店」を立ち上げた三輪哲さん。読み聞かせ、定期購読サービス、原画展など様々な取り組みで絵本の魅力を伝え、地域の人々に愛されてきた。1994年に今池に移転し、2018年に惜しまれつつ閉店したが、2021年には息子である三輪丈太郎さんが名古屋市千種区山門町で新店舗をオープンした。常に第一線で活躍してこられた三輪さんのこれまでの歩みと、絵本に対する想いを伺った。

(聞き手：黒田杏子)

### 絵本との出会い

一まずは、子どもの頃のお話からお聞かせください。お生まれは静岡でしたよね。

公には静岡ということになってるんですが、正確には台湾で生まれているんです。1944年（昭和19年）ですから、戦争が終わりかけている年でした。引き揚げで日本に帰ってくる船の中で満一歳の誕生日を迎えました。縁をたどって家族で静岡に居を構え、僕は南山大学に進学するために名古屋に来ました。実は三輪家は代々、名古屋なんです。ところが、僕の父親っていうのがちょっと変わり者で、仕事でもあれやったりこれやったりで転々としてた。その中で、台湾にも行ったんですね。僕も最終的にはここに戻ってきたので、つくづく僕には名古屋人の血が流れているんだなあと思います。

一子どもの頃から絵本に触れてこられていたのでしょうか。

僕の幼少期は戦後すぐですから、数少なかったですね。もともと子どもは本というものが好きなんです。僕もそうだった。でも、子どもと本との出会いを作ってあげるというのは大

人の役目なんですよ。当時はそれがあまりできる時代ではなかった。

そういう中で、数少ない本との出会いは鮮明に記憶に残っています。たとえば『ちびくろ・さんぼ』（※1）。僕は5人兄弟の4番目なんです。ある時、父親が妹へのクリスマスプレゼントとしてこの本を買ってきたんです。この本に出てくる169枚のパンケーキがたまらなくおいしそうで、何回も何回も読みました。本でお腹を膨らませていたようなものです。結局、この本は妹に内緒で自分のものにしちゃったんです。



### 絵本という特別なメディア

一大人になってからはどのように絵本と付き合っていたんですか。

僕は本当は絵描きになりたかった。絵本作家になりたかったんです。特別なメディアに見えたんだろうな。文章と絵が織り

なす不思議な世界。そこに読者を連れて行ってくれる。そういう絵本の世界に浸りたくて、随分とコレクトしていましたね。その頃に出会ったのが、チャールズ・キーピングの『ジョゼフのにわ』（※2）の原書です。子どもだましじゃない、人の心の内面の深いところを描いた作品です。出会ったのはたしか、丸善で年に一度開催されていた「せかいの絵本展」という洋書のフェアですね。毎年楽しみで、絵本を買うためにお金を貯めてました。いの一番に並んだ覚えがあります。

## アメリカの本屋には匂いがある

一 大学卒業後は、会社に4年間お勤めになったあとアメリカに渡られたんですね。その頃から、子どもの本専門店を作るとい目標をお持ちだったのでしょうか。

はい、若気の至りですね。勢いです。今だったらまずやりません。当時、世界中どこにもなかったんです。世界ではじめての「子どもの本専門店」を作りたい、それがまず第一だったんです。誰かがやっていることの二番煎じじゃつまらないから。

アメリカに行った理由は、アメリカの本屋には「匂い」があったからです。日本の場合ですと、委託制度(※3)というのがあって、書店は売れなきゃ返せばいい。これは、本に対する冒瀆だと僕は思っています。ところがアメリカには日本のようなシステムがないので、書店は自分たちの責任で仕入れをしている。だから本屋に行くと、この店はこういう本が好きなんじゃないか、この店のおやじとなら子どもの本の話が一日中でもできるぞ、というのが棚を見ればわかる。そんな本屋の楽しみ方を知りましたね。それともう一つ。なんとなくアメリカの時代の流れ、ビジネスのメソッド、在り方。そういうものが日本の10年先を行ってると思った。だから当時も、アメリカに行けば10年後の日本の姿が見えると思ったんです。10年後の書店は、外食産業は、社会はどうなっているんだろう。そして、そういう時代を生きるだろう10年後の子どもたちのためにやれることがあるんじゃないかと、強く感じました。

## 日本初の子どもの本専門店

一 メルヘンハウスを創業された当時、日本で初めての「子どもの本専門店」でしたが、反応はいかがでしたか。

僕は、やっぱり先見の明があったんだね。メルヘンハウスがオープンした後、雨後のたけのこみたいに、続々と子どもの本専門店ができました。3年から5年くらいの間に全国で100軒くらいできたんじゃないかな。でも皆、経営が苦しかったんですね。そこで皆を集めて、BBYP (Better Books for Young People) っていうグループを作った。書店というのは



1973年オープン当時のメルヘンハウス外観



今池時代のメルヘンハウス外観

薄利多売の商売ですが、漫画や雑誌のような売れ筋を置かないで、子どもの本だけで食っていくというのは大変なことだった。お互いに情報を交換したり、開業のサポートをしたり、出版社と交渉したりと、子どもの本の業界全体で、なんとかやっていく方法を模索していました。今思えば、えらそうなことを言ったと思いますが、「君たちはビジネスをやっている。僕たちは文化だ。出版ビジネスというのはやめて、出版文化という言葉を使いなさい」と。そんなことを出版社に訴えました。

## 宇宙人の子どもが喜ぶ本

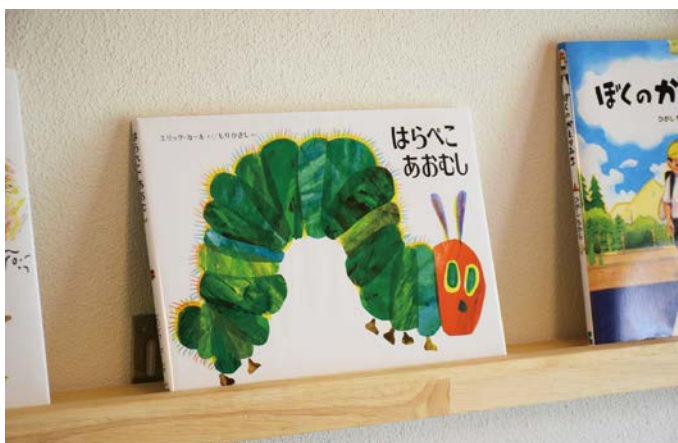
子どもと本っていうのは、いつの時代でも同じ問題を抱えているんです。100年近く前にフランスの思想家が書いた『本・子ども・大人』（※4）という本の中で、子どもの本というのを大人は間違っって解釈している、教育の一環だと思っている。と書かれていて、僕が感じていた違和感はこれだ！と思ったんです。例えば本を読んであげる時、赤い色はこれよ、青はこれ。左に曲がるっていうのはこっちに曲がるのよ、と復習させられる。つまり教科書なんです。『ちびくろ・さんぼ』を読んだら、パンケーキが美味しそうでお腹がグーグー鳴る。それが楽しい。体が反応する楽しさとか面白さを否定して、「さあ昨日読

んだお話では、パンケーキを何枚食べたでしょう」とかやったら台無し。そういうことを平気でやっちゃうんです。僕が一番毛嫌いしてるのは、課題図書の感想文。そういうのをやらされている子どもたちはいつの時代にもいるんです。やめようよそんなこと、と。



『もこもこもこ』(※5)という絵本があります。今ではロングセラーと言われてますが、当時は売れなくて困ったんですよ。元永定正という世界的なシルクスクリーンの作家と、谷川俊太郎という変な詩人。宇宙人が二人揃ってる。この本が発売された時、僕は書評でこう書いた。「宇宙人の絵描きと、宇宙人の詩人と、宇宙人の子どもが喜ぶ本なんだ。凡人ではわかりません!」と。宇宙人に読んであげるようなもの、そういうのが本当の子どもの本だよ、ということを問題提起した。当たり前なことなんだけど、誰かが言っていかなきゃいけないんですよ。

そして大人たちが、かつて子どもだったころに絵本に触れていたということも大切なんです。そうすれば、自身の読書体験を含めて次世代の子どもに伝えていくことができる。それは自分が読んでいない本を子どもに与えるっていうのとは全然違うことだと思う。だから、一世代待てば理解されるだろうと僕は思った。でも今だに、実際に売れている本っていうのはこういう本じゃないんですね。それだけ、絵本は教科書でなければいけないという考えは根強い。けれどせっかくだいい文化財が



あるんだから変わらなきゃいけない。エリック・カールの『はらぺこあおむし』(※6)は世界中で大ベストセラー、日本でも440万部も売れてるんだよ。カールおじさんが書いて、親から子、子から孫へと手渡されることで歴史ができた。そういう本がたくさん出てくると、子どもの本の世界っていうのも変わっていくと思う。

## 0歳から100歳まで

一よく考えたら、絵本というのは本の中でも不思議なジャンルですよ。時代が変わっても同じように楽しめるし、自分が読んで面白かったものを子どもにも渡したい、というのは、小説などではごく一部の作品以外は成し得ないことだと思うんですよ。

そうですね。これも僕が好んで使う言葉なんだけど、「絵本は0歳から100歳まで一緒に楽しめる」。絵本の、他のものがない面白さっていうのはその辺りにもある気がしている。僕は80年代、CBCラジオに8年間出演していたことがあって。テレビ塔から電波を発信していたから、「朝です。高いところからすみません」と、絵本の紹介をやってました。ある日、ガブリエル・パンサンの『セレスティーヌ』(※7)という絵本を探り上げました。掃除夫のくまさんが、ゴミ箱の中で死にかけていたネズミを助けてあげて、仲良く一緒に生活をするっていうお話。相方のアナウンサーは「子どもの本じゃないよね、これ」って言ってました。そこで紹介する本は、抽選でリスナーに当たるようになっていた。そしたら、番組をいつも聞いてくれていたおばあちゃんにこの本が当たって、長い手紙を送ってくれたんです。「私は、子どもの本は子どものものだと思ってた。だけど違うね。こんなに子どもの本は面白いんだ。私はこれから“読者”になります」って。それから毎週、手紙をくれました。部屋の一角に「おばあちゃん絵本文庫」という看板のついた本棚を作って、その写真も送ってくれました。嬉しかったですね。年齢を問わず、何度でも絵本と出会うことはできるんだなと改めて感じました。

## 子どもから学ぶこと

一お店をやってこられた45年間を今振り返って、印象に残っている出来事がありますか。

小学生の女の子3人がメルヘンハウスに来て、『わたしのワンピース』(※8)を読んでいた。「ラランロロン…」と、来るたびに代わりばんこに読んでいる。僕は嬉しくてしょうがないから、来るのを楽しみにしていた。ところがある日、なんだかいつもと様子が違う。なんだだろうと思ってそばに寄って行ったら、お話の続きを作ろうと話してたんです。面白いなあ



と思って、仕事をしながら耳をそばだてて聞いていました。そうすると、東山動物園が出てきた。「そのあと、うさちゃんは東山動物園に行きました。東山動物園は子どもはタダです。まず、うさちゃんは象さんに会いました。象さんと握手しました。そしたらワンピースは象の模様になりました。次はゴリラさんに会いました。ゴリラさんと握手したら、ゴリラの模様になりました。キリンさんになりました。お猿さんになりました…」なんと、動物園の見学順路になってるんです。で、オチがまたすごい。「次に、うさちゃんはどこに行ったと思いますか？赤ちゃん動物園に行きました。赤ちゃん動物園はいろんな動物の赤ちゃんがいる一角です。そこへ行って、いろんな動物の赤ちゃんを抱っこしました。最後に、うさちゃんが抱っこしたのはウサギの赤ちゃんでした。そうしたら、ワンピースはウサギの赤ちゃんの模様になりました。おしまい」

この話を作家のにしまきさんに伝えたんです。そうしたら、にしまきさんは感動して泣き出して。「私、負けた」と。子どもに負けた、と言うんです。子どもってというのはすごいパワーを持っている。そのパワーを、僕たちがよかれと思ってしていることで、かえって潰していつちゃうケースもある。そうじゃなくて、子どもから学ぶっていうことをしなきゃいけない。子どもの本屋をやっているっていう喜びっていうのは、こうやって毎日のようにドラマがあって、子どもから学べる機会がたくさんあるんです。そして僕が大事だと思うのは、子どもとの出会いをドラマだと感じ取ってくれる大人が、子どものそばにいるっていうことなんです。だから、簡単に「子どものために」っていうけれど、そんな簡単なものではないんですよ。本当は。

## 出会いを広げていく

— 2021年には二代目の丈太郎さんが新店舗をオープンされました。新しいメルヘンハウスに期待することはありますか。

僕にも、父や母、周囲の人から、「学校の先生になれ」とか、「こうあるべきだ」とか丁寧な教えがありました。全部、反発してきました。人間が人生を送るっていうのは反発なんです。

だから本人がやりたいことであればどういう形でも、間違ったことではなければいいんじゃないかなと思う。

僕はね、子どもの本専門店をやったよかったですよ。ひと言でいうと、「出会い」ですね。それは本との出会いであり、作家との出会いであり、読者との出会いであり。「出会い」を広げていきかけとして、こんなに素晴らしい仕事はないです。本屋という場所と、本という上質なものと、そこに人という三つが重なって初めてできるものだと思うんです。場所、もの、人。だから本屋っていうのは、いつの時代も、そういう意味での楽しさを僕らに与えてくれているんじゃないかな。



哲さんと丈太郎さん



現在のメルヘンハウス外観

- ※1 『ちびくろ・さんぼ』作：ヘレン・バンナーマン、絵：フランク・トピアス、訳：光吉夏弥／岩波書店 刊（1988年に絶版、現在は瑞雲舎より復刊）
- ※2 『ジョゼフのにわ』作・絵：チャールズ・キーピング、訳：猪熊葉子／らくだ出版 刊
- ※3 出版社、問屋（取次）、書店の三者間での契約に基づき、定められた期間内であれば書店からの返品が認められる販売方法。
- ※4 『本・子ども・大人』著：ポール・アザール、訳：矢崎源九郎、横山正矢／紀伊國屋書店 刊
- ※5 『もこ もこもこ』作：谷川 俊太郎、絵：元永定正／文研出版 刊
- ※6 『はらべこあおむし』作・絵：エリック・カール、訳：もりひさし／偕成社 刊
- ※7 『セレスティヤ』作・絵：ガブリエル・バンサン、訳：もりひさし／BL出版 刊
- ※8 『わたしのワンピース』作・絵：にしまきかよこ／こくま社 刊

Report

# 視点

## 第18回ショパン国際ピアノコンクールを中心とした若手音楽家の躍進

2021年、第18回ショパン国際ピアノコンクール（以下「ショパンコンクール」）が開催され、多くの日本人も予備予選を通過し、ポーランドのワルシャワで演奏を披露することができた。第2位に入賞した反田恭平さんをはじめ躍進が著しい。反田さんはショパンコンクールで第2位に輝きながらも、指揮者の道を志しているとのこと、さらに活動の幅を広げようとしている。これまでも世界的な音楽家のアシュケナーズやバレンボイムのように、ピアニスト兼指揮者という例があるが、日本人の音楽家も、今後さらに多様性のある活躍がみられるのではないかと予感している。（まとめ：瀧津清仁）

### 愛知県ゆかりのピアニストがショパンコンクールで活躍！

第18回ショパンコンクールには愛知県ゆかりのピアニストもエントリーされている。沢田蒼梧（さわだそうご・半田市出身）さんと、進藤実優（しんどうみゆ・大府市出身）さんのお二人である。“なごや文化情報”の誌面らしく、この地域にゆかりのあるピアニストに焦点を当てたい。

沢田さんは活動の多様性という点でとても興味深い。2022年7月に、沢田さんのお母様と連絡を取り合う機会を得て、沢田さんの近況を伺った。現在、沢田さんは名古屋大学医学部医学科6年生に在籍しながら、ピアニストとして活動している。朝から晩まで病院での研修に加え、大学の卒業試験や国家試験に向けて、時間がどれだけあっても足りないという状況の中、武豊町民会館ゆめたろうプラザ（2022年8月開催）や三井住友海上しらかわホール（同年9月開催）におけるソロリサイタルの準備をし、新しいレパートリーにも挑戦するなど非常に精力的である。

筆者は、沢田さんと半田市のマツイン楽器店主催のコンサートにて2010、2011、2012年と共演した。



大府市楽友協会管弦楽団  
第37回定期演奏会

その後、再び2014年に大府市楽友協会管弦楽団第37回定期演奏会（沢田さんは当時、東海高校1年生）で共演し、リストのピアノ協奏曲第1番変ホ長調の演奏を聴いた。強烈な個性でグイグイと引っ張っていく勢いのある演奏だったことを記憶している。また、第18回ショパンコンクールの二次予選の演奏動画がYouTubeで視聴できるので、彼の若々しい演奏ぶりをご覧いただけることと思う。

### 沢田さんのコメントを紹介

沢田さんがコンクール直後にインタビューを受けたYouTubeのコメントを紹介したい。「親御さんがもしピアノが弾けるのであればお子さんに弾いてあげたり、周りに音楽が好きながいたら音楽の話をしたり、そうした中で音楽が楽しいと思って続けられるのであれば、それが一番いいと思っている。習いに行くとかでもなく、家で楽器を触ることができる環境があれば下手の横好きでもいいので楽しんでほしい」とのこと。音楽への率直な愛情と飾らない人柄が感じられる、とても印象的なコメントであった。

### 留学とさらなる飛躍

進藤さんは2021年モスクワ音楽院附属中央音楽学校を卒業し、現在は海外で研鑽を積みながら、コンクールに挑戦したり、リサイタルを開催したりと、活躍の幅を広げている。

進藤さんが大府市立共長小学校5年生の時、筆者は2013年マツイン楽器店主催コンサートにおいて、メンデルスゾーン作曲ピアノ協奏曲第1番短調第3楽章、2018年11月の大府市楽友協会管弦楽団第44回定期演奏会、さらには2022年3月にも刈谷市総合文化センター主催の吹奏楽団かりやプラスプロジェクト19期「スプリングコンサート」にてチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番で共演している。そうしたご縁からSNSで交流が続いているので、今回誌面で採り上げるにあたって読者に一言



かりやプラスプロジェクト  
19期スプリングコンサート



メッセージをお願いしたところ、「みなさま、はじめまして。ピアニストの進藤実優と申します。何度か共演させていただき、お世話になっている指揮者の濱津清仁先生より、『自由に書いてください』とおっしゃっていただいたため、とっても自由に (!) 書かせていただきます」とご快諾いただいた。



進藤さんとともに

## 進藤さんの考える演奏家の使命とは？

「簡単に言ってしまうと、モーツァルト、ベートーヴェン、ショパンなどの偉大な作曲家たちが残した作品を、聴衆に届けることが私たちの使命です。クラシックの場合、ほとんどの作曲家は既に亡くなっているため、私たちは残された“楽譜”からしか、作曲家の声を聴くことができません。もちろん、その曲が書かれた背景などを知らずして演奏はできませんが、私たちが伝えるべきものというのは、楽譜にしか詰まっていないのです。

あるインタビューで、『作品そのものが感情やメッセージを持っているのか、それとも演奏家がそれを与えるのか、どちらでしょう』と聞かれたことがあります。こんなにも本質的な質問は生まれて初めてでしたので、鮮明に覚えています。

例えば、作曲家自身が付けた題名、ある決まったリズムや和音・和声・調性など、曲そのものがメッセージを持っている場合があります。また、作品について脈々と受け継がれているエピソードなどから、作曲家の想いを辿るということもあります。ですが、楽譜には“ここは私が泣いている場面”や“ここは恋人が喜んでいる場面”などの説明はないわけです。ですので、現在の私の答えとしては、“作品そのものが感情やメッセージを持っている場合もあるが、ない場合もある。どちらにしても、演奏家は自分の感情ではなく音を、そして音でつくる空間を聴衆と共有しなくてはならない”ということです。

楽譜には、速度、強弱、音の長さ、音のスピード、旋律の区切り、ときには感情などを表す記号（表情豊かに、気まぐれに、甘く、歌うように etc.）が溢れています。私たちはその全てに従わないといけません。練習というのは、とても現実的で、どちらかというと“作業”に近いのです。作曲家からの注文を、全てこなさなければいけない。だけど、全てこなした後に、本当の意味での“自由”を感じます。開放とは違う“自由”を感じます。とても不思議なことだと思いませんか？ 私自身の感情というものは、そこにはないのです。いくつかの音の連なりを、私たちは運んでいるだけなのに。このような意味で、作曲家が創造した作品も、それを演奏家が聴衆に伝えるという行為もまた、芸術であると私は考えます。

これは全て20歳の現在の私の考えです。40歳になったら、はたまた60歳になったら、全く違うことを言っているかもしれません。そのときはどうか、お許しください(笑)」と率直に語られた言葉からも、今後のさらなる活躍が期待される。

## 期待の若手音楽家はピアニストだけにあらず！

2022年7月に刈谷市総合文化センター管弦楽団第5回定期演奏会で共演したヴァイオリニストの水越菜生（みずこしな お・刈谷市出身）さんも見逃せない。南山高校女子部を卒業し、現在は特待生として桐朋学園大学4年在学中。2018年1月にはNHKナゴヤニューイヤーコンサートにソリストとして出演し、同年7月にはカーネギーホールにてソロリサイタルを開催するなど国際的な活躍を見せている。

また管楽器ではフルートの齋藤華香（さいとうかこ・名古屋市出身）さんが特筆される。明和高校音楽科を卒業、現在、東京藝術大学音楽学部器楽科4年在学中。共演したことはないものの、2022年3月のスター・クラシックス・ガラコンサートでライネッケ作曲フルート協奏曲二長調を披露してくれた。2人とも安定した技術と音楽性を持ち合わせていて、将来が楽しみである。



刈谷市総合文化センター管弦楽団第5回定期演奏会



水越さんとともに

# #zoom up

ズーム・アップ

画家

みず かみ たく や

## 水上卓哉さん

アール・ブリュットの時代の中で。

最近では福祉や美術の世界で、障がいがある方の作品を「アール・ブリュット」という言葉で語られます。この「アール・ブリュット」という言葉は、ピカソと同時代を生きた画家ジャン・デュビュッフェ（1901～1985）が作った言葉です。「アール・ブリュット」は「加工されていない芸術」という意味のフ



ランス語「art brut」が語源です。フランス語の「brut」が「生のまま、自然のまま」という意味であることから、「生（き）の芸術」とも訳されます。アール・ブリュットの旗手として注目されている画家の水上卓哉さんにお話を伺いました。（聞き手：鈴木敏春）

### 将来を囑望される若手アーティスト

2022年9月6日から18日まで、名古屋市民ギャラリー栄8階全室を使って、気鋭の画家である水上卓哉さんの個展「水上卓哉の世界～イノチトハ～」が開催される予定です（本稿執筆は2022年8月）。市民ギャラリー栄の開館30周年を記念して始まる、次世代アーティスト企画展の第1回の作家として150点もの作品を展示します。会期中は音楽ライブやミニコンサート、水上さんの実演制作も計画されている大規模な個展です。

### 生命の力強さ

水上さんは1990年名古屋市で生まれ、子どもの頃は合唱団に参加したり、和太鼓を叩いたり、ピアノを演奏したりと、音楽好き、多感で活動的な少年でした。ところが、卒業식을4日後に控えた小学6年生の時に遭遇した交通事故が原因で、身体・言語・高次脳機能障がいを背負うこととなります。塾からの帰り道の横断歩道で自転車に乗っていた水上さんを、スピード超過の車がはねたとのこと。身体中を骨折し、頭を

強く打ちつけてしまい、1か月半ほど意識が戻らず、一時は生命の危険を覚悟せざるを得ないほどの壮絶なものでした。お母様の真由美さんにも、「卓哉には妹と弟もいます。子どもたちの前で、母親がうろたえ、泣くわけにはいきません。私は、病院へ向かう車の中と、お風呂の中で、ひとり声を上げて泣きました。あのときはもう、一生分泣いた気がします。それでもできる限りプラス思考でいようと努力しました。入院日記にも、『卓哉 復活の記録』というタイトルをつけました。そして、当時アニメで流行っていた言葉を使って、『あなたは選ばれし者だからね!』と声をかけ続けました」と当時を振り返っていただきました。

障がいをどう捉えていくかは本人のスタンスによりますが、水上さんは、障がいは戦うものではなく“共生”するものと捉えています。また、障がいと共生するためにも、両親や家族というコアな関係者の理解が大切なことはいまでもないでしょう。さらに、水上さんにとっては、5歳から通い始めた絵画教室のAアートアカデミーで出会った、谷口泉先生の「好きなものを好きなように描けばいい」という方針のもとで養われた色彩感覚が、その後の活動の原点となっています。谷口先生には、後の美術大学受験でも指導を受け、今も交流が続いているとのこと。「先生の画塾の雰囲気が好きで、今でも何気なくお邪魔しては、お話を伺ったりしています」と水上さん。



交通事故以前、和太鼓（中央）やピアノに親しむ水上さん



多くの医療スタッフの尽力により、退院を迎える水上さん

### どこまでも優しいまなざし

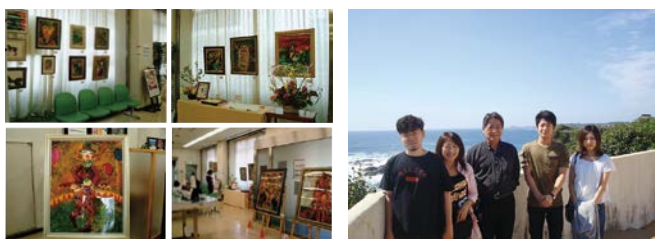
事故から8か月を経て、車いす生活が送れるようになった水上さんは、名古屋養護学校中等部に復学。2年生からは「自分がいるべきところはこちらではないんだ!」という水上さんの強い要望から、地元の中学校に移ります。お母様との親子通学でした。次いで、名古屋福祉専門学校の高等課程に通い、華道部と美術部に所属レインスタレーションを学びました。高校では周りの生徒が率先してサポートしてくれたため、大変助けられ、介助者や福祉の役割の尊さを知ったといいます。一方で、「華道部の先生に手を入れられるのが嫌いでした。それでは私の作品ではありません、と口答えしたものです」とも語る水上さんですが、持ち前の自立精神から高校1年を終える頃には画家の道を志し、谷口先生の指導に加え、画塾を掛け持ちするなどの苦労を経て、2009年に晴れて京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）通信教育部洋画科

ースに入学しました。

## 家族の愛といのちのきらめき

在学中の2010年には地元にある名古屋銀行小田井支店のロビーにて初の個展「はじめの一步」を開催。これが水上さんが語るどころの、家族一丸で創作活動をサポートする“チーム水上”の始まりです。これは水上さんの創作活動の中でも、とりわけエポックメイキングな出来事だと思います。家族や地域とのつながりを原動力に、新しい挑戦に取り組む“チーム水上”。蓮池や活断層といった水上さんが興味を惹かれる題材への取材にもフットワーク軽く、障がいによる制約を越えていきます。これまでの定形的な美術だけが美術であると思うのはもう古いのだと、ひしひしと感じます。

2014年に名古屋人権啓発センター・ソレイユプラザなごやにて名古屋市人権週間記念企画展「水上卓哉作品展200年後の対話」を開催。この時、筆者は初めて水上さんにお目にかかりました。作品の中でも特に印象的だったのは自画像で、深い思索の賜物であると感じました。また少年時代に描いた作品からは、きらめくようないのちの躍動感を感じます。



初個展「はじめの一步」(2010年)

ご家族と

## 自然の存在感に迫る

2016年には『ともに生きる』で若手画家の登竜門といわれるシェル美術賞(現・Idemitsu Art Award)に入選。さらに2017年京都造形芸術大学大学院(通信教育)を修了し、修了制作展で研究室優秀賞を受賞。大学では4回生に進むための単位取得に苦労し、3回生を3度経験するなど、水上さん曰く「大変な」学生時代だったこともあり、最もうれしい賞であるとのこと。大学では、洋画家で、蓮を描いたシリーズで知られる川村悦子教授に師事するとともに、原田憲一教授の自然学、環境学の授業をきっかけに地層に関心を抱くようになります。水上さんの制作テーマ“oneness(一つであること)”の原点は、授業で学んだ200年先の未来、7代先の子孫に美しい地球を残すという、ネイティブアメリカンの教えであり、水上さんは、「人も虫も花も動物も、一つの地球に生きる一つの命にすぎません。人間だけが資源を採り過ぎたり、汚し過ぎたり、使い過ぎてはいないかを考えています。その大切さを伝えることを使命に絵を描いているんです」と語ってくれました。水上さんは“いのち”や“自然”を題材にした作品を多数発表し、その大切さを伝えてくれています。

2017年、第二回融合・国際障害者芸術展(日本代表)ベスト創造賞を受賞し、武漢市障害者連合会に作品が収蔵。2018年に2回目のシェル美術賞入選を果たし、2019年には損保ジャパン日本興亜美術賞FACE2019に入選。同年愛知

県清須市に常設のギャラリーであるガレリア卓をオープンさせるなど、大学院修了後の活躍も目を矚るものがあります。

「普通の人々の頭のなかに現行の文化的形態だけが芸術創造に許されたものであることを叩き込むのではなく、彼ら自身が自分がつくりたいと思うものにふさわしい未知の形態、彼らの固有の生地にふさわしい鑄型を発明するように示唆するならば、多くの人々が芸術創造に没頭するようになるには思われる。彼らのやる気を失なわせるのは彼らに提供される鑄型であり、彼らのものではない生地しか流し込めない鑄型なのだ。だから彼らは諦めてしまうのである。文化は卵が孵化するのを妨げるのが得意なのだ」。これは、冒頭に引用したデュビュッフェの言葉ですが、筆者は水上さんの活動と相通じるものがあると感じました。

今後も障がいと共生し、アール・ブリュットの旗手として、素晴らしい作品を発表されることを大いに期待しています。



2016年シェル美術賞2016入選  
『ともに生きる』



2016年度京都造形芸術大学  
大学院通信修了制作展にて  
(2017年3月)



FACE2019入選『またここで会おう』



2018年に開設したガレリア卓

# なごやの文化を 褒められると、 うれしい。



名古屋市文化基金  
Nagoya Culture Fund

わたしの寄附で、土を耕す。 わたしの寄附が、文化になる。

名古屋市観光文化交流局  
文化歴史まちづくり部文化芸術推進課  
TEL: 052-972-3172

ご寄附のお問い合わせ  
名古屋市文化基金 Eメールアドレス  
a3172@kankobunkakoryu.city.nagoya.lg.jp

公益財団法人  
名古屋市文化振興事業団  
TEL: 052-249-9390

詳しくは、市公式ウェブサイト内 **名古屋市文化基金**

名古屋市



頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー



アートディレクター



印刷コンサルタント

**駒田印刷株式会社** TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <http://www.kp-c.co.jp>

WE MAKE YOU MOVE  
感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz



PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK  
舞台音響 / 映像設備  
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

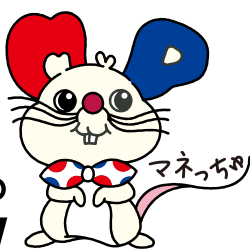
お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する  
**株式会社 エーアンドブイ**  
〒464-0846 愛知県名古屋市中区城木町二丁目98  
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

**MANAGEMENT PRO**  
**株式会社 マネージメント・プロ**



「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

**ナゴヤ劇場ジャーナル**

- ◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
- ◎毎月24,000部発行

※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM等にて配布

〒461-0004 名古屋市中区東区葵2-11-22 アバンテッジ葵ビル301

TEL: (052)508-5095

FAX: (052)508-5097

Web: [www.mane-pro.com](http://www.mane-pro.com)

E-mail: [mane-pro@mane-pro.com](mailto:mane-pro@mane-pro.com)